女人堂
高野山

心中萬年草

近松門左衛門作

上之卷

女嫌やる—高野山は昔より女人禁制なれば云ふ事、女の許へ通ふ意をかむ　見文珠—弘法大師が男色の道を愛傳へたりと也　衆道—若衆を愛する道　傳子—茶碗

歌女嫌やる、高野の山に、何故に女松は生ゆるぞや。何故に女松が生へまいならば、夜這星でも飛まいか。松より梅より柳より、お寺小性の兒櫻、兒文珠の御相傳、大師の廣め置き給ひ、俗も尊む若衆の情、衆道祕密のお山とかや。南谷の吉祥院に、播磨大名の使者有とて、庭の掃除の下男、小性衆は客殿の、床に掛物、臺子の塵埃、掃いつ拭ふつ忙しさ。「是長助、關介、掃除が大方出來たらば、不動坂まで一走り、御使者が見へるか見て戻りや。急ぎやく」と有ければ、「いやそれは餘の者遣らしやりませ。私共は皆様の髪を結ねばなりませぬ。寺方のお小性は、俗の内義と同じ事。法印様の奥様の髪は結はずに濟ますか」と、じやれをまうけの顔ひねて、足らぬ心の花之丞、「ムヽそんなら此方は法印様と女夫か。エヽ在所の父様や母様は嘘付じや。山へ登れば魚喰ふ事がなら

じやれをまうけ—下僕の酒落を置受に聞いてゐる小性の顔は大人びたり

はむ—海鰻山の芋云々—喜賀の鰻となる事うちつけにいふたれども昔よりいひ習はしたり（撮壽抄）
お日待—十五日の祭禮、日待は日祭の意（安齋隨筆）
ぼてれん—腹のふくれたる形容
噛む—齧む
いつゝもゝ—いつもか
賢い人—猫呆を態と反對に云ふ

ぬ程に、豆腐や蒟蒻を、鯛やはむじやと思ふて喰へ、山の芋を鰻と思へ、法印樣を親と思へとばつかりで、女夫とは聞なんだが、ア、思ひ當つた。一昨日のお日待に、法印樣の相伴で、善哉餅を十三杯、それから身持になつたやら、ぼてれんじやは皆小小性の、顏を赤めて挨拶せず。久米之介は年嵩にて、「なふ花殿、笑止な事いふ人じや。是に御坐る主膳殿、八彌殿、右門殿、年は三ツ四ツ下なれど、此方の心が足らぬ故、なぶられて居さつしやる。此方は他國者なれば、當地では此方の里を賴みにして、一家同然の此方を笑はせて本意でない。此久米之介が居る内は侮らせはせまいが、追付お暇申請、國へ歸つた其跡では、高野一山のなぶり者、少たしなんで下され」と、いへばむつと腹を立、非鈍な事云やんな。法印樣の女房が法印樣と竝んで、善哉餅喰ふて孕んだがおかしいか。コレ忝もおれが親は、紙屋の宿で隱れもない雜賀屋の與治右衛門、母樣と一所にいつよも物を喰やるでおれも生れる、お梅といふ美しゐ妹迄生みやつた。其方も何時も此方へ來て、妹のお梅と二人土藏へ這入て、善哉餅を喰しやるやら、お梅が聲で味ひくといふたを、おれや聞たぞ」といひければ、久米之介は赤面し、殘りの傍輩口々に、「賢い人のいふ事を、氣にかけては果がない。去ながら、正直な法印樣

のお耳へ入ては云譯ならぬ。小性仲間の恥辱なり。沙汰しやるな」と制せられ、六尺共も聞流し、「阿房に油斷は猶ならぬ」と、目まぜしてこそ入にけれ。やゝ有て表より、「成田久米之介樣に逢申たい。お國の親御武右衞門樣よりの飛脚なり」と、若黨一人刀の先に、女箱付てつゝと入。「ムゝ久米之介とは身がこと。國許よりの使とは氣遣はし」と云ければ、「いや別義にてもなく、御老體の武右衞門樣、御隱居の願ひに付、久米之介を呼戻さんと、御一門の談合極り、法印樣への御狀段々の御口上、兎角は首尾能お暇の出る樣に、御傍輩樣達へも賴みませとの御使」と、文取出せば久米之介、「是は思ひ寄らぬ事。父が老後の大望を違背ならず、と云ながら我口からは申されず。何れも傍輩云合せ、お暇の出る樣に、執合せ賴みます。狀も進ぜて能い樣に、いづれもに任する」と、手を合すれば人々も、「心一ぱい申て見ん」と、一度に坐敷を立けるが、花之丞ふり返り、「これ久米殿、お暇囉ふて往しやらば、糠袋はおれに下され、巾著にして穴市の、つぶ入ます」と打連れて、皆々奥にぞ入にける。飛脚はそつと側に寄り、「申お國からとはいつはり、雜賀屋へ出入いたす、岸の和田の九兵衞と申駕籠の者。お梅樣の賴で、密にお咄しいたせと有。彼の御存ちの京の紙屋、此中下つて逗留し、二三日中に祝言し、其明る日、

綱口上―口で傳へる斷

執合―法印樣に取成しを賴む

糠袋―男をつくる品物

穴一―子供の殿にする勝負事、百日會我に出づ

お梅樣を京へ連て參るとて、内方にも御用意。兎角お前が片時も早く、山をお出なさるると、何處ぞへ一所に立退くか、分別も有處。それ故内々約束の如く、お國の親御の儕狀で、お暇取て今日中に、久米樣連て來てくれと、いとしほやお梅樣、涙を流し手を合せ、お賴みなされた手前も有、どうぞお共いたしたし。詳しい事はお筆に」と、懷中よりお梅が文、取出してぞ渡しける。久米之介も心せき、「成程〳〵其筈。其方も知ての上なれば、隱す事は少しも無い。外の者に添はせては、生て居られぬ二人の中。親の命と有からは、法印了簡ないとても、暇請捨て出易し。先文見ん」と封〴〵切、讀んとすれば南無三寶、上包はお梅が文、久米樣との名宛にて、中は吉祥院法印樣參、成田武右衞門、親の文。久米「ムヽ扨は聞へた、お梅が常々男手を能ふ書くゆへに、國許の狀をも人賴みするなと、下書書て渡せしが、隱忍んでする事とて、封違へて我文が、法印の手に渡つたか。これは〳〵」と色違へ、立ても居ても詮方なく　うろたへ廻る折柄に、主膳立出、「是々飛脚、法印直に問ふこと有、先休息召れとの事なり」と、云も敢ぬに久米之介、「なふ主膳殿、最前の文を法印樣は、はや御披見なされたか。封じ目お切なされずは、そつと取て來て下され。一期の御恩」といひければ「イヤ其狀は、法印樣繰返し披見有、反

もあ共―もあ供

聞へた―わかつた　男手―男の書く　堅い文字　國許の云々―久米の國からの狀

細谷川―平通盛、我懇は細谷川の丸太橋ふみ返されてゐる、袖或(原裏記)太遣―邪許にて學ぶ大太者呼ぶ邪許(淮南子)ひんよろい―かけ聲　播磨―聲をはり上ゐにかく　妣母―亡母　日牌―毎日讀經の後法名を讀みて供養す　祠堂銀―寺(寄附する供養料　御追福―死者の冥福を祈る事　五十六億云々―彌勒が釋迦に紹ぎて出ちらい迄の年數　納所―事務を掌る僧

故棚へ入鋌下し、手が汚れた勿躰ないと、跡で手水をなされたが、如何なる狀で御坐るぞ」と、問へ共譯は吡されず、はつと計に胸躍らし、「詮義に逢はど如何せふ」と、飛脚の九兵衛が心迄、細谷川の丸木橋、文返れとぞ祈りける。時に麓の山動搖む、木遣に法のひんよろい、聲播磨路の大名より、御墓引こそ三重殊勝なれ。則宿坊吉祥院、僧達立合、石塔請取給ひければ、使者は坐敷に直りける。法印やがて出迎ひ、「遙々のお使者御太儀〳〵、いざ〳〵是へ。それお盃、お茶持て參れ」と挨拶有。使者の侍慇懃に、「旦那が妣母第七年に方りし故、御當山に石牌を立、日牌を供へ申に付、祠堂銀五百枚奉納いたされ候。御受納あつて末世末代、不退轉の御回向頼み存候」と包みの白銀、目錄添て渡しければ、「武門の御身に、御信心御孝行の御追福、感じ入候。それ我山に卒塔婆一本殘せし人は、五十六億七千萬歳の後、彌勒の出世に逢せ給はん御誓願、などか疑ひ候べき。先此銀子の請取認め申さん」と、法印奥に入給へば、豫て用意の勝手より、銚子盃重箱や、はや吸物の椀折敷、善盡したる馳走なり。御住の弟子祐辨律師を始めとして、納所同宿入替り立替り、「山中と申、風情はなく共御時分能し、お吸物でもお代へなされ。それ小性衆、相手になつて御酒一ツ、緩りと上つて下され」と、待遇へば愛嬌

の、小性は「おい」と色めきける。使者も數獻を傾け、「扨々御きりやうなる小性衆、いづれもお名は何と申、御生國は何國々々の御方ぞ、仰聞られよ」と云ければ、甲「我等は有村主膳と申、當國田邊の者」乙「私はよつぎ八彌と申大和の者」丙「身共は伊賀の上野の生れ小栗右門と申ます」丁「私は此籠紙屋の宿、雜賀屋の花之丞、年は十九で法印樣の御内義、私が妹にお梅と申て、ずんど伽羅めで御座れ共、惜い事は女子で、坊樣の口へはいりませぬ。私が顏は花の樣で花之丞と申まする。妹をお梅といふ譯は、如何した事か知らね共、彼の梅といふものを、此方は割て見さしやつたか。中に平たい物が有。此方のお梅が中にも、それが有やら無いやら、ついしか割て見ませぬ。無念な事」とぞ眞顏成。使者も返答し兼れば、傍輩は笑止がり、「是しい〳〵」と袖を引。久米之介はお梅が噂、聞に付ても彼の文の、法印の手に渡り、今や詮義の有かとて、思痛める胸の中、釘を打る八寸の、給仕も更に手につかず　目に涙持つ計なり。使者重ねて、「御自分はお年嵩と見へ申、お名は何と、生國は」と問ひければ、久米「我らは揉州飾磨、成田武右衞門が忰、同名久米之介」使「ム、扨は同國武右衞門子息、高野に有は此方か」と、見上ては泣出し、見下しては涙にくれ、打萎れて見へければ、身に思ひある久米之介、心便りも無き折柄、

ずんと伽羅―四名美人

八寸―八寸釘と八寸四方の小き勝にかく

同名―同苗

故郷の人の染々の、涙にほだされ側に寄り、「一見に馴々敷事ながら、同國のよしみと申、御落涙の樣子、御心底の優しさも推量つて賴み奉る。私事此山に、一夜も足をとゞめ難き身の難義出來いたし、幸ひ國より迎ひも參る、具の事は麓にて、お物語いたしません。お詞を添へられ、法印より暇を取、今日中に此山を連てお出下されば、生々世々の御恩に受け、命の親と存じませふ」と、身の置處なきまゝに、粗忽の無心も戀路ゆへ若氣故こそ是非なけれ。使者膝を立直し、「是久米之介、お主が山へ登つたは、末は出家の筈成に、今此山が出たいとは、還俗したい心よな。ヤレ出家する因緣を忘れたか恨めしゐ。お手前十二歳の時、傍輩伊吹重太夫が二男、卯之介といふ十一に成とも達と、雞合の友達喧嘩、あへなくお主が手にかゝつた、卯之介が兄、伊吹千右衞門とは身共が事。其比は數年の在江戸、後日に聞けば、殿よりは切腹との御評�ぢ、父母が了簡にて子の可愛いは同じ事、親達へ歎きをかけ、討れし者の爲でもなし、出家させて、稚い者の後世弔はせんとの扱ひにて、我親共が命を助け、當山へは登らぬか。一人の弟が死骸をも見ぬ懷しさ。せめての形見に其方を一目見たさに、此度のお使ひを望み受け、小性衆の名を尋ね、久米之介と聞よりも、弟が有ならば今年は十八蕾む花、つれなくも討たかと思へ共、

お主が手に云々―久次の手に移された

當山へ云々―此山へ登つたではないか

あらためて恨みを云はん樣もなく、仇を恩成出家して、後世を助けてくれるか、と思へば形見の心地もする。恨めしいと床しいと、未練の涙を翻したが、口惜しるぞ久米之介。たとへ親の敵でも出家は各別、在家となれば見遁し置れぬ弟の敵。此山が下り度いとは、それこそ望む處。麓に下つて、八年以來鬱憤を散ぜん。法印に斷り申爲、御意を得ん」と立處へ法印駈出、「樣子詳しく承る。やれ若衆奴、をのれは未だ髮こそ剃らね、九字護身法傳授して、禮拜化敎も勤むれば出家も同然。殊に大師以來結界淸淨の御山、假にも女犯の穢があれば、一山暴て震動し、其身は狗賓に五體を裂れ、木の枝にかけらるゝは、目にも見せ咄も聞ふ。それを知て此寺を、能ふも〳〵穢したな。國元の親から珍らしい文を得た。此年になれ共、思ひまゐらせ候べく候。御けんの如く二世三世、くされ〳〵と血判を据へた、小舌たるい女子文、手に觸れたは今日始め。梅よりとは誰が事。皺の寄た此法印を、梅干に譬へたか。師匠と思ふな弟子でもない。あのお使者の手に懸り、死のふが生よふが構ない。彼れ引ずり出せ叩き出せ。十一から致へた經文も眞言も、魔道へ捨たか勿體ない」と、腹立涙にくれ給へば、久米之介は伏沈み、有あふ小性同宿も、側から何と千右衛門、呆れ果たる計なり。祐辨律師走り出、久米之介が袴腰破るゝ計に、

九字護身法―蹈兵法者皆陣列在前と唱へながら咒を空中に書く事（真丈雜記）
結界―法力にて惡魔を入れぬ區域
狗賓―天狗
候ふべく候―女文に多く用ふ。候ふに同じ
くされ〳〵―罵の詞
千右衛門―せんにかく

踏付け〳〵引起し、齒嚙をなして涙を流し、「エヽ見損ふた悖奴、其根性とは夢にも知らず、兄弟の契約の念比したは何事ぞ。雜賀屋にはお梅といふ若い娘も有程に、出入するには行義が大事、浮名ばし立られな、若衆のたしなみ是第一、兄分に恥かゝすなと、起居にいふたを忘れたか。これ千石衞門殿、今迄愚僧が存ぜしは、彼奴は敵持たる身、若も覘ふ人あらば、拔刀の下へ此法師が驅入て討れんと、一命やつたる中なれ共、只今懇切る上は、金胎兩部の大日も御照覽ましませ、ふびん共存ぜず。御舍弟の敵、サアお手にかけられ」と、坐敷の下へ取て投げ、「俗の女を恭ふより、法師の身にて少人を、思ふは幾千優るぞや。其兄分を袖になし、こゝろざしを無下にした、憎や無念や淺間しや」と、氷の樣なる眼より、涙をはら〳〵とぞ流しける。千石衞門續いて下り、「心ないには似たれ共、寺を出れば弟の敵、討たでは武士の道立たず」と、するりと拔て背打に、四ツ五ツ丁々と打つけ、是からは死したる人、此方遺恨なき上は、心次第に師弟の中、何卒挨拶いたしたい」と、さすがは武士の神妙さ。久米之介わつと聲を上、「只今の背打も、打て打るゝ身の報ひ、恥辱とも思はね共、山の名殘に、法印樣の御機嫌損ふ悲さと、二世と賴みし兄分を、袖にしたとの恨みの詞、悲うて〳〵死んでも迷ひと成まする。疾に髮

金胎兩部―金剛界と胎藏界
少人―若衆
袖になし―身にするの裏にてのけものにする
（俚言集覽）

おんでもない―いふまでもない事

を鄰たらば、此悔みも有まい物。坊主頭のすげない顏、兄分に見せる悲しさに、せめて二十歲を越す迄と、髮を撫顏つくり、身嗜みが身の敎、お梅に思ひ初められた、是も前世の因果かや。お梅に逢ふて斷り立、緣を切て來ましたら、元の樣に念比に可愛がつて下さるか。草「をんでもない事、女と緣さへ切たらば、身にかへても法印樣へ、佗言申て念比せふが、誠緣を切らずは、大師の罰を受ふといふ誓文を立てふか」久米「如何にも誓文立ませふ」草「サア立て、サア何と」久米「エヽ、此方は切らふと思へ共、お梅が合點せぬ時は、何としませふ悲しや」と、かつぱと伏て泣きければ、「それ其心の付くこそは、罰の當つたしるしぞや。はや出て失ふ」とどうど伏し、共泣するこそ道理なれ。其際に法印、以前の文を取出し、「山に置くは穢らはし、持て失ふ」と投付給へば、恥かしさうにそつと取、肌懷に入れけるが、男女破戒の御咎め、俄に吹來る天狗風、岩も枯木もどう〳〵と、震動雷電雨霰、天地一つに黑雲覆ひ、長夜の闇とぞ三重成にける。「すは一山の大事なり　不動坂まで追出せ」と、下僧下僕が小腕引立て、棒よ杵よとひしめいたり。流石よしみの花之丞、「是久米殿、妹が事は氣遣ひさつしやんな。此方の居所知れる迄は、おれが女房に持てやろ」と、聞も苦しき名殘の山、髮も鬢も引亂かれ、涙亂れて目も暗

く、さらば〳〵と振返り、啼音もかるゝ鶯や、お梅に通を失ひし、久米が心ぞ 三重 哀れなる。

通を失ふ—久米仙人が女の衣を洗ふ白脛を見て通を失ひ墜落せるをかけたり（元享釋書）

白紙—無垢の未通女をさす、お梅の家は紙屋なれば紙の事を纏けたり

横紙—無理非道を横紙を破ると云ふ、塵紙に散り、鼻紙に花をかけたり

又—まだか

氣もすしや—酸しに粹をかけた

鱠をかけ—鱠大根を細く削ぐ事

宿老—町内の取締

廣め—祝言の披露

中之巻

逢ぬ昔の白紙も、忍び重ねて厚紙を、人に裂るゝ横紙に、袖濡紙の漏れやすき、浮名やばつと塵紙の、嵐に脆き鼻紙や、又十七のほところ子、名さへお梅は氣もすしや。親與次右衛門、活々として外より返り、「お梅が祝言いよ〳〵今宵に極つた。今朝いひ付た通り、市介、傳九郎鱠をかけ。夏よ雜煮の用意爲い。竹膳立も奇麗に爲い。聟殿は京、烏丸の人なれば、黒椀が能からふ。塗盃はいらぬぞ、年の往かぬ娘じや、土器を三寶に、口取は鰒斗昆布、肴は鯖車海老、熊野から囉ふた鹽貝があらふ。ヤ鹽貝の序に女房共は何處に居る」と、嬉がるのも親心。下女「おゑゝ樣は中二階に、お梅樣の髮梳て」といひければ、二階の口まで駈上り、父「こりやく、、宿老殿へ往て談合した。皆内證勝手づくの祝言なれば、廣めは重ねて下つた時。今宵杯濟んだらば、娘は最早聟の物、とんと先へ渡いて女夫連で、明日早々上して退いと云るゝ」と、勢ひかゝる親の顔、見るよりお

こうけん―憂家の意か權力の義
まだ外に―乖之介をさすかすらする―仄めかす
共―供
つゝごかし云々―竹筒に百文づつ入れてあるを筒が倒れて錢が溢れた風で九文十文づゝ拔取れと也
九十六文云々―當時は九六百文とて九十六文をもて百文に當てたれば云ふ

梅は涙ぐみ、「急な事いふて下さんす。盃さへ延べて欲けれど、親のこうけん是非なふて、如何なり共と云ました。京上りは待て、氏神へも參りたし。阿房でも兄は兄、花樣にも知らする筈。日比懇切遊ばして、お守よ御符よと、御恩を受た祐辨樣、お山には未だ外に介をさすかすらする―仄めかす も」と、其人の名は云兼て、思ふ邊りをかすらする、是も思ひの餘りかや。母親も打頷き、「チヽそれも左樣じやがこんな事、念比な方へ知らすれば、贔の祝義のと、厄介かけるが迷惑じや。兎角聟御の心次第、サア御座れ」と、納戸へ入れば與次右衞門、「これ嗅聟の共の者共、これの内の奴等にも、何がなしに三百宛お引をやるが合點じや。つょごかしの顏で、つらりと九文十文づょ、百の口を拔て置けや」母「ハテ此方も餘まりな。お梅が一世一代に何が惜いぞ。矢張九十六文で、百宛遣て置かしやれ」と、連て納戸に入りにけり。お梅は稚き時よりも、あまやかされて二親に、我儘云ひしならはしも、心に疵を持たれば、いぶりもならずすねられず。「アヽ九兵衞は何故遲いぞ。久米樣の返事は」とそろ〳〵表へ出けるが、女子丁稚が口々に、「よふお梅樣、晩には立聞いたしましよ。京のおか樣にならつしやる」と、なぶられても浮々せず、母「アヽ何云やる。京へ往こやら冥途へ往こやら、知れた事か」と門に立、坂を見上て居る所へ、久米之介は頬冠り、九

そゝけた—亂れたいりわり—いりわけくどくく—功德に精しくをかけたり　婆羅僧揭諦—陀羅尼の文句に立腹をかくぼじそあか—菩提婆娑訶　婆訶を赤にかく　念者—若衆の兄分　熟え—惱氣一さい云タ—諺、一災あれば必ず二災あるもの　賴母し—賴母講、卽ち無盡

兵衞も投首して、辻へ見ゆれば走り寄り、「なふ能う來て下さんした。文にいふて遣る通り、京の奴めと今夜盃する筈で、私が氣は今朝からとんと死で居たはいの」と、縋付て泣にけり。久米「チヽ、和女は氣が死んだか。私は叩かれ引摺られ、身も心も死にまする。嘘なら是」と手を取つて、袖から、梅背中がハアたんと腫て有はいの。鬢もそゝけた、顏も泣た顏じや。こりや如何ぞいの」といりわりも、いはず知らずに泣居たり。九兵衞不請な調子にて、「エヽ、麁相なお梅樣、文を封じ違へて、久米樣への懦文が法印樣のお手に入、何が日比法印樣、眞言陀羅尼讀だ目で、くどくは御見思ひ〳〵と、讀で波羅僧揭諦を立て、ぼじそあかなる面相、念者坊の祐辨樣は、蹈殺すとて熱へさつしやる。一さい起れば二さい起る、お國からは弟の敵じやとやら申て、理窟臭い侍が背打を喰はする。弘法大師御入定八百年以來の、一山の大騷ぎ、飛脚の詮義も有さうで、私は据つた膳箸も取らずに隱れいる。其間にお山が暴て來て、天狗殿が鼻を怒らかし、大雨大風雷霆、大事の山を久米之介が穢したと叩き出されて、かくの躰にておはします。お二人の御蔭で烟草入を落しました。中に賴母の懸錢七十四文あつた物、定めて狗賓に攫れたで御座らふ。正眞の天狗賴母子じや」と、ぶつくさ云ふも道理なり。梅「チヽ、其樣な事内へ沙汰

天狗頻母子—富の事

もうへ—入口を逆入つた國獄墓のあた廣間

てれふれ—照り降り

駑馬—強き馬

してたもんなや。山は暴へても崩れても、久米樣に逢へば嬉しゐく。此方樣嬉しうないかいの。少笑ふて見せて下さんせ」と、いふても前後思はれて、泣顏見ゆる不便さよ。親は「お梅よく」と門口見遣りて、「誰じや、ヤア久米樣か。九兵衞これは何ッとして。呼に遣たい處へ、能ふこそく、まづ内へ。嘸久米樣が御座つたぞ。暮たに何故に火に灯さぬ。お梅が祝言常とは違ふた。二階は蠟燭、庭もおうへも、燈心を攝込んで赫々とやれ」と、勇む處へ母親は、なりふりを心得難くや思ひけん、「いつの間に、九兵衞は此處へも寄らず山へ往て。お梅が祝言聞てお出なされたか」と、不審さう成かほ色を、九兵衞見て取つゝと出、「久米樣のお仕合、未だお聞なされぬか。お國の親子御隱居で、跡目をお繼なさるゝ筈で、私も在所から早飛脚に雇はれ、打通りに上りました。日比の念比、暇請の爲、ちよつとつれて寄てくれ、祐辨樣も追付其處へと有事。今日からは是れ七百石の御世繼。旦那樣物は談合、お梅樣の御祝言未だ盃なされぬ先、彼方を變改なされて、久米樣へ進ぜられまいか。私やお爲申ます。祐辨樣も大方其御心と見へました。千貫目持ても商人は、一時の損が知れませぬ。てれふれなしに七百石、すればお前もお手柄。雜賀屋の聟殿がひん〳〵跳る駑馬に乘て、娘子は金物の乘物に乘らつ

ねちみゝくゝ〳〵ツ〳〵ときれはなれのわるい

九貫五百目云々―當時金一兩に付銀六十目替なれば百六十兩で九貫六百目となるを百目まけて貰ふ

しやる。サアしやんと打ませふ」と、手を廣げても、翠「イヤ先あ打まい」九「ハテねちみやくした。そんなら舅姑御夫婦も乘物やじや〳〵馬」と、乘せてもいかな乘らばこそ。「いや〳〵馬は馬連、牛は牛連。今日祝言する翠殿は、京三條烏丸美濃屋の作右衛門、お梅を欲しゐばつかりで、年々の殘銀九貫五百匁、百六十兩で帳消して、此秋の買入に、紅の花の樣な小判二百五十兩、先へ預けて置れた。今宵の物入仕拵へ、此方には一文入ませず、娘を裸體で請取翠は、世間にちッとありかねる。何んと九兵衛」といひければ、九「イヤ久米之介樣も、小判の事は請合れぬ、お梅樣を裸體でならば、鬼に鐵棒で御坐りましよ」翠「コレ阿房な事はいはずとも、翠がおじやるか出て見よ。是お梅、久米樣二階へ連まして、新しく出來た寢道具を見せましや。こりや女子共、肴を鼠に引るゝな」と、鼠の用心しながらも、二人二階へ上たるは、是こそ猫に鰹魚なれ。二階には古渡りの大紋緞子の夜の物、二ツ枕の總付を、妬しそふに久米之介、「ムゝ〳〵京の男と、此枕を竝べて、此夜著を被て、二人しつぽりと寢さんしよの。アゝひよんな物見せて、又泣かせて下さるか」と、ほろ〳〵涙を流しける。梅「エイ嫌がらす樣な事聞度ふない。京の奴と何んの寢よ。今夜中に連立て走るぞゑ。胸を極めて下さんせ。此夜著蒲團に今の奴が寢

くさる筈。エヽ嫌らしる煩さやと」　蹈ちや〳〵くつて擲ほをり、尊「是は又私がの新しる寢道具、祝ふて寢初て欲しけれど、人が來ふかと氣遣いな。ア、辛氣や」と、壁みしは夜著にもたれ合ひ、誰も勿來の關心、花のお梅に鶯の、人來と厭ふわりなさよ。時に美濃屋の作右衛門、小僕を連て突と入、與治右衛門が髻を取て引寄する。女房始め下々も、「是は聊爾」と取付くを、作「寄るな〳〵」と打拂ひ、取て引据へ「こりや與治右衛門、京の者をはめ立したら、返報を喰はふ用心せい。親代々の得意で二十年以來、二千貫目足らずのあき内に、九貫目のほこりを取り、先も見へぬ秋買に、十五貫目の前銀取、祝言の仕入に四貫目取、情夫の有娘を被かせて、さらせて構はぬ工面じやな。此邊では未だ流行るか、京大坂では、其手の騙瞞は廢つた。サア娘の首を渡すか、二十八貫目戻すか、二ツ一ツの返事を聞かふ。ヤイ一升入袋は海川でも一升、肩の能いものゝ仕合見よ。盃せぬばつかりで二十八貫目捨ふた。惠美須大黑が乘移つた作右衛門をこかそふや、措てくれ」とぞ罵りける。與治右衛門眞直者、ぐつと急て、「ヤア京々と喧しる、頬げたが過る。七十萬石の下にすむ與治右衛門、氣の狹い己們が蔑みとは違はふ。銀返すは易けれど、云詰られて戻したといはるゝが口惜ゐ、娘にも疵が付く。サア男のある證據を

髻みしは―原本のまゝ
誰も勿來ヨヤ―誰も來るなと也、關に急きをかく
人來と厭ふ―古今集、梅の花見にこそ來つれ鶯の人來〳〵と厭たしもなる
はめ立―歎問
ほこり―はした金、髻(俗訓髻)
肩のよい―運のよい
頬げた―口

わちを燒れて―おだてられて　にち―理窟ばる

涼し―奇麗

共―供

垢を脫ぐ―冤を雪ぐ

出せ。何處ぞでわらを燒れて、銀が惜うなつたか。慮外申た御免あれ、と詫言させて其上で、是非に祝言させねば、娘の垢が脫けぬ。サア證據を出せ」とにちければ、家内の上下泌慄り、二階には逃場もなく、死ぬるより外分別の、泣ひつ顫ふつ狼狽ゆる。作右衞門押沈め、「證據〳〵と涼しそふに云やるな。身は明日立つ合點で、今朝から御山へ上つたが、八ッ時でもあらふか、俄に山が暴れ出して、大雷雨風、一期に覺へぬ怖い事、さる寺へ駈込んで、樣子を具さに聞たれば、南谷吉祥院の小性久米之介といふ者と、雜賀屋のお梅と數年密通して、山を穢した其祟り。それゆへ今追出さるゝと一山が見物、後姿を己も見た。飛脚の樣な奴が共して麓へ下つた」と、いふより九兵衞もじり〳〵と、門の方へ後退り、亭主もはつと二階を見れば、女房賢く「いや〳〵〳〵、其分では胡論な。此方の人、娘が垢をぬかつしやれ。狼狽て娘一人捨さつしやるな。是々」と膝を突けば合點し、與ヲヽ、飲込んだ。こりや男、雷が鳴たとて、此方の娘が不義のある證據にはなるまいぞ。どふでも今宵祝言させ、くゝり付て往なさねば、雜賀屋の與治右衞門が町へ頰が出されぬ。手柄に聟にして見せふ」作ヲヽ、おれが身代見掛ては、定て聟に欲からふ。二十八貫目の銀では、疵のない手入らずの女房が持るゝ。おれが銀で拵へた夜

著蒲團から取てくれふ」と、二階へ上れば與治右衛門、「腕捻折らふ」と引下し、上を下へと摑み合ふ。久米之介は脇指拔て、すはといはどと縋付、お梅がわつと泣く聲も、下には聞かず叫き合ふ。女房中を押分て、「此方の人から默らッしやれ。待て下され聟殿」と、彼方を拜み此方をおがみ、やう〳〵兩方押沈め、瓦破と伏して泣けるが、「都衆共覺へぬ物の情の無い事や。是程迄取結び、サア祝言の場と成て、打破つて此方夫婦、世間が立たふか身がたとふか。男を持ぬ娘子は、誰が身の上に何事のあるまい共云難し。過つる事に二親が迷惑するを聞ならば、氣の細い娘なり、先の小性も堪へかねて、死ふとするは必定。留に往るゝじぎでもなし。必ず死ぬるな死ぬまいぞ、此處は死ぬる場でないぞ。親に歎きをかけるといひ、其身も無い難受ける事、親孝行と思はど、必ず死んでくれるな、と先づ斯ういふて留めたらば、よもやとは思へ共、若い心の一筋に、恥しいとばつかりで、若や死ふか悲しや」と、知らせの詞一つをも、皆兩方へ架橋の、二階にも聞取りて、拔たる脇指さすが又、死もやられず聲立てず、抱き合てぞ泣居たる。母なふ親はどれも替らねど、母の名汚すも雪ぐのも、娘の育ちの善惡から。お梅が一期の疵つけば、三十年添ふた此方の人に、頰かい拭ふて添はれもせず、是非に一旦盃して、男

夫を持ぬ云々―まだ夫を持たぬ女は密夫などのないとも限らぬ

兩方へ架橋―二階と作右衛門とにかけて口をきく

かい拭ふて―ふき拭ひて

代なしても—費りても

生る瀬云々—危険を冒す事七度あるとの諺

ひつしよな〳〵—取亂して男持たぬ前云々—夫を持てば愼むべきが持たぬ前に彼是云ふはいらぬふ世話と也

有ふまで—までは強辭にて意義なし

の手柄に何時でも、退去は世の習ひ。子が立てこそ能もあれ、屋財家財代なしても、返す物を返やさずに置く與次右衞門でさら〳〵なし。母が此歎きを聞、お梅が爰へ出るならば、それを機會に和睦して、祝義を渡して下され。例へお梅が我を立て〻座數へ出まいと云とても、先方の小性も木竹では有まいし、先往きや〳〵といやる筈。それも聞ねば不孝者、子を一人育つるに、生る瀬か死ぬる瀬が七度あるとは稚い内。十七八に丈長伸び、親に夜の目も寢させぬか。憎いものには世話燒ぬ、子を持たらば思ひ知らふぞ。恨しの世の中や」と、聲を上てぞ口說きける。久米之介も聞取て、「後は兎もあれ、親御の心安める爲、涙も拭ふて下てたも。拜む〳〵」と勸められ、口惜涙ひつしよな〻、梯子とん〳〵踏鳴し、駈下りて、梅「これ母樣、いたづらも惡性も、男持たぬ前ならば、いはれぬ構いじや有まいか。それに意地無地いふ人は、放からかいて置しやんせ。私が斯樣して出るのは佗言といふ物、それでも合點ないからは、氣に入らぬで有ふ迄。田舍育ちのわしじや者、なんの都の目に入らふ」と、身振もすねて見へにけり。聟はお梅に搖られ、につこと笑ひ、「是親仁お袋默らつしやれ。彼が此處へ出てくれて、今の詞で千倍じや。頭の上で踊ても去ることでは御座らぬ。サア寢所へ」と手を引ば、二親屋内

打うるほひ、「ハア目出度い〳〵。去ながら先此處で盃事、其間にそれ〳〵」と、氣を付てもがけ共、作「いや〳〵今宵も四ッ過、軈て夜半寐る間がない。目出度ふ閨の盃」と寢所急ぐ氣毒さ。甥「平に此處で酒盛なされ、其間に内との者一獻酌めや。酒を酌め そりやくめ〳〵」とあがいても、何處へ落さん久米之介、夜著引被き身をちゞめ、生たる心地はなかりけり。聟は蒲團に延し上り、「ヤア誰ぞ寢たやら嗳かな。さらば此夜著を被て、盃せふ」と久米之介が臥たる夜著を取らんとす。壽「アヽ是々、此方樣計寢よふでの。とんと二人が一度に寢る。盃濟む迄いかな事、夜著に手をもかけさせぬ」と、もたれかゝりし夜著の袖、足を擦り手をしめて、夫に力を付ければ、作「一ッに寢やうは忝る。銚子早ふ」と呼ぶ内に、夜半の鐘も鳴渡る。下には夫婦手に汗握り、九兵衛其外小隅へ寄り、供の者にも酒盛て、爰「醉ふた時分に臺所の火を消して闇に爲い。二階の酒のしゆんだ比、祝義の石を打込んで、騷ぐ拍子に蠟燭を踏こかし、どやくや紛れに久米殿の、手を引門へ脫かそふぞ。仕損へばお梅が首がないぞ。脫るな」と諜し合て酒肴、下では下人盛潰し、二階を母の酌人は、怪我あらせじの氣遣ひや。作右は母に時宜もなく、差いつ差されつ時宜作法、大盃四五杯引かけ、「なふお袋、姑に酌とらせ、無益しいか知

しゆんだ—酣なる
祝義の石—祝儀に石打つ事當時の習はしにて神事より起る（滑遊笑覽）
無益しい—餘計事な

らね共、斯ふ召さつたが能い筈。作右衛門程の聟は慮外ながら取憎い。久米之介は若衆で前髪は有ふが己が様に小判の前髪は有まい。彼の様な奴等が娘子共を唆し、京大坂にも有こと、大方果は心中、ホヽ嫌な事、お梅は命拾らやる、親御は娘拾らやる、おれは盃ひらはふ」と、又三杯引續け、「サア寢ませう、お袋彼方へ往なしやれ」と、夜著引立てんとする所へ　大石をはたと打。是はと驚く頭の上、障子雨戸を打破り、大石小石透間なく、はらり〳〵と三疊投げければ、お梅は此處を大事ぞと、久米之介に抱付、作右衛門はひよろ〳〵足、「お梅は、危い夜著被きや」と立寄れば、母親燭臺を蹈こかし「やれ暗いは火を灯せ」と、いふ聲に與次右衛門、下の火殘らず吹消して、常闇の夜と成こけり。母ははい寄り　久米之介が手を取て引出す。喫驚するも夢心地、お梅は久米が帶を取、尾行て出るも闇の夜の、母はかく共知らばこそ。作右衛門度を失ひ、「お梅は何處に」梅「イヤ爰に居まする」作「暗がりで怪我しやんな。お袋は何處へぞ」梅「火を取にでがな御坐んしよ。此方樣勝手知らずじや、動かずに御坐んせ。私も此處に居まする」と、聲が殘れば母親も、一人と思ひ連て出る。お梅は跡も恐ろしく、母に知らせぬ足音をば、火を蹈む如く爪立てゝ、顫ひ〳〵沓脫迄忍び出、母、久米之介に呼きて、「此方は命の亡

聲が殘る―お梅は久米に尾行て出でたれば也　沓脫―入口の下

い人なれど　お梅が歎く不便さに、此方夫婦が了簡で今宵の命を助ける。お梅は男定ればば、思ひきらねばならぬぞや。是はお梅が呑んだ盃、これを形身の縁切」と、懐にいれければ、二人は死ぬる覺悟の上、心の中の暇請い、顔は見られぬ暗闇に、「ま一度聲を」と躊躇へば、「遅い〳〵」と氣を急きて、急ぐは我子の死を急ぐ。産出すも母、死なすも母、生死二ツの門口を、明て出行先も闇、跡も子ゆへの闇の夜に、迷ふ親こそ三重悲しけれ。

下之卷

歌「幻しや。定業の限りとは、いかに如何成娑婆ならむ」梅「世は何の譬ぞ、逢初て早三歳、かけ計の契にて、夫は野中の一ツ井戸、名は後の世の形見かや。殘す形見は親の爲、我はそ様の前髪の、長き來世もわしが此、直さぬ額は此儘で、見たり見せたり六道の、辻の衢は多く共、はぐれまいぞと夕月は、はや入果て更渡る、未だ如月の八重霞、隱れ忍ぶによけれ共、顔が見憎の朧夜や、二ツ能い事嵐吹、木の下露の玉川の、毒の雫も降るならば　身に疵付けず、死度や」と、顔と顔とを摺寄て、翻す涙はうのづから、

駄を脱ぎ置く石

子故の闇―後撰集人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな

幻や云マ―死の來るは幻の如し世―もゝ桁久米の中

直さぬ額―嵐の時の姿

夕月―いふにかく嵐吹く―あらずにかく玉川―風雅集に忘れても汲みや

しつちん旅人の高野の奥の玉川の水とあるより畠ありと傳ふ

縛の繩—不動の金縛の繩

猛き心や—猛と云より梓弓と續け夫より春張の彌生にかく

尼が口—弘法大師の母公の遺跡

捻岩—母公が罪障の爲高野に登ちれぬをいちて捻ぢたる岩をいふ（姫鏡）

五月雨云々—松の落葉卷五にある唄に、なよ、みは拍子詞

佛の御母—空海の母公

みめうの橋—御廟の橋とゝ長さ

互ひの口に傳へ入、末期の水と成けらし。扨「刃を急ぐ我命、末短夜の春の霜、羨しやな朝まで、消へ残るかと白妙に、里の夜業も時過て、干も紙屋の宿はづれ、生れ在所の名残さへ、親より殿を思ふぞや」扨、我はそもじの親御の恩、戀と思ひに縛られて、情の羈絆縛の繩、不動坂にも差懸り、死出の山路を越ゆるかと、歌心細しや外は谷、こゝ夏川と引留問へば、爰は古の刈萱殿の、しるし繁りし春の草。クドキ問ふて語つた味氣なや。彼の刈萱弓取の、猛き心や梓弓、彌生の空の月の前、櫻が下の盃に、開いた花は散りもせで、花の蕾に身を捨て、無常の夜語身の上に、十九十八一盛り、今宵散り行初櫻、兒が瀧」とぞ涙ぐむ。扨彼れへ越ゆれば尼の口、去年母親と連立て、拜みし事の忘られず。哀佛の御母も、女の罪の捻岩や、それさへあるに我身の科は、歌「五月雨に、ほゝ戀慕はれて終にな、秋田のよ落し水」山は眠りて物いわず、谷の流れよ聲立て、人に語るな此姿、私が心を此方樣に、隱す事とて持ね共、頼む佛の御名問へば、我をば外の不動樣、二親よりも捨難き、嘸や若木の花の兄、歎き恨みの數々も、二人が上に罰受くる、天竺一の山風、締た肌にしみ〴〵と、サア悲しゑ、いとしといふも今の間の、冥途の苦患覺束な。此世からさへ嫌はれて、深く心を奥の院、渡らぬ先に渡られぬ、みめうの橋の

四間四尺、罪障深き者は渡られずとなり　さいなまる云々―呵責せられても離れまい

晦月―垢つきにかく　五障―女人が成佛できぬ五つのさはり　付―著

危さも、後世のみせしめ蛇柳や、鬼が千疋責ふぞ、責られつ、さいなまるゝと離れまい、放すまいぞ」と取かはす、袂は涙、手には數珠、賴めや賴め一筋に、一心頂禮萬德圓滿釋迦如來信心舍利、舍利々々佛に成とても、又は三途に迷ふ共、一ッ囘向の水汲めや、手向の梅の花折坂、迦り超ればあか月の、五障の雲に埋もるゝ、女人堂にぞ三重付にける。

若い心の一向に、死んで來世で〳〵と、思ふ心のがつくりと、「サア著ました嬉しや」と、勇むは跡の歎きなり。堂の内には我より先、泊りし女中の眼をさまし、「申々」と呼かくる。「あい」といふのも怯氣立、身を抱合いて居たりしが、「イヤお氣遣な者ではなし。私は播磨の飾磨にて、成田武右衛門娘さつと申者、南谷の吉祥院に、久米之介と申弟を尋ねて、今日の暮方、下人共を登せ訪はせても、有共無しとも知れ難く、坂の麓紙屋の宿を尋よといふ人も有、皆樣土地のお衆か、若し御存じも有まいか」と、他人に見做す姉弟、後世の闇路も知られたり。弟は骨肉恩愛の、涙にくれて應へもなう、暫し躊躇ひ居たりしが、「久米之介とは聞たる人、昨日の晝より俄に大病引受て、今宵限りの命なりと申せしが、夜明なば、生死の定説かくれ有まじ」と、涙をかくす聲付を、姉はそれ

萬年草―杉葉に似たる草にて酷葉を水中に浮ぶれば他國人の生死を知る（近代世事談）

御告が―御告か歟

共猶知らず、「さればこそ思ひ當つたれ。此お山の萬年草は、人の命の生死を示し給ふと申故、余りの事の訝しさ、守に入し萬年草を、彼の谷川の水に漬け、久米之介と心ざし、半時計浸しても、次第に枯れて萎みしが、弟が命有まいとの大師樣の御告が。遙々と尋ね來て、昨日にも著くならば、せめて死目に逢ふ物。男の身ならば一山を、駈廻つても逢ふもの、女と生れし惡業は、淺ましや悲しや」と、聲を上てぞ泣きければ、夫婦も共に伏沈み、お梅涙の隙よりも、「親御樣をもお誘ひか、但し姉樣計か」然「なふ其事よ。父樣が去年の冬から煩ひて、此二月の朔日に、六十九にて御臨終、明ク る二日に煙となし、今日七日の弔ひを、兄弟一所に拜まんと、此お骨を持て上りしに、弟も同じ骨となし、すご〳〵歸つて母樣に、何と申さん定めなの浮世や」と、又さめ〴〵と泣きければ、久米之介は我親の、骨と聞より氣も亂れ、お梅は一目も見ぬ舅、緣といはふか、因果といはふか、心に含み目に漏るゝ、涙を袖にせきかねて、わつと絶入計なり。側に臥たる供の下女、「あれ申七ツの鐘が鳴ます。善か惡か、夜が明たら知れませふ。アヽ此方は草臥れて、何が善やらあくびやら、ふら〳〵眠る心なき。「アヽそれもそふ、御用あるも存ぜず、引留めて長物語、是も他生の御緣でこそ。若し久米が事を聞付なされなば、お知

あくび―疑とかく

らせを頼みます。何れもに別るゝも、殊更名殘惜うて、久米之介が臨終の暇請をする樣で、心細ふて悲しや」と、物が知らする血の出緣、涙すゝむる計にて、いはず知らせず別れしは、本意なくも三重又哀れなり。堂の小蔭に身を潛め、暫片時も婆婆に居る内は見るも聞も皆罪障、夜明も近づく此上に、いか成苦しみ恥をか見ん。いざ死なふ」と呵けば、梅「早ふ死に度ふ御坐んする。去ながら此方樣は、餘所ながらも姉御に逢ひ、親御の御骨の側にて、談しる最期じやが、わしは父樣母樣の、悲ゐ中にも不孝者と、叱られふかと氣にかゝり、是が迷ひと成ます」と、又泣出せば、桔「是々、宵に母御の下されし盃は愛にあり。手に觸れられし物といひ、志の籠つた形見は是ぞ」と取出す、梅「アヽ有難い。丈長の伸た私を、親の心で何時も童と思ふて、抱て寢て下さんした其心で死ましよ」と、盃肌に手を合せ、刃を待たる其顏、桔「ヲヽ奇麗な〳〵、和女は母の形見を持、我は父の骨の側、夫婦親子一蓮の、示しの時刻延されず、只今ぞ」と脇指拔き、胸に押當おんあぼぎや、べいろしやのまかもだら、まにはんどまじんばらはらはりたや、吽と突込む切尖の、膽にあたれば反返り、はりたやうんとくり通す、阿吽の息も消へ〳〵と、反つゝ返しつ苦しむ聲、姉主從は驚きて、走り寄て南無三寶「人殺し人殺しよ」と呼は

おんあぼぎや云々―陀羅尼の文句　阿吽―氣息の出入、阿は生、吽は死の相

阿字本不生―阿字に向て本來不生の理を觀ずる阿字―初めて口を開く聲之を一切教法の本となす

土砂の功德―死骸の腐くなりし時眞言の法にて土砂を撒けば柔くなる

れ共、山中夜中聞人も、泣て麓へ走りけり。久米之介身を隱し、立歸れば骨桶に、樒を添へて殘したり。押戴き三拜し、分て賜はる骨肉を、一ツに返す阿字本不生、阿字の一刀是なりと、咽にぐつと突立て、死骸の上に法の花、梅と枕を竝べける。地水火風の風は山、水は谷水土は又、土砂の功德の眞言祕密、善男子善女人堂、心中斯とぞ聞へける。